

アフガニスタン 人道援助活動への回帰



ミシェル・ホフマン(国境なき医師団のアフガニスタンにおける活動責任者)

ソフィー・デロネー(MSF エグゼクティブ・ディレクター)

邦訳版

2010年3月

(同時掲載)

北大西洋条約機構(NATO)会議におけるMSF インターナショナル会長による講演(2009年12月8日)



アフガニスタンが置かれた状況

*“MSF の活動に対する理解を得て当事者に受け容れられることは
アフガニスタンで活動し始めてから常に難題であり続けた”*

2008 年の終わり、アフガニスタン・ファラー州からの避難民らが、アフガニスタン国内で直面した武力衝突の惨状を、イランで活動する国境なき医師団(MSF)の援助活動従事者に語った。2008 年夏の悲惨さは、1980 年代のソ連軍による占領時代にも経験したことがなかったと語る者もいた。国連はその 1 年後、2009 年は現在の戦争が始まった 2001 年 11 月以来、アフガニスタン市民にとって最悪の 1 年間だったと報じた。¹

今日、この武力衝突に、多国籍軍とタリバンなど反政府勢力との戦闘、汚職・犯罪・アヘン貿易・パキスタンの部族支配地帯での緊張の高まりが複雑に絡み合って追い討ちをかけ、民間人に厳しい犠牲を強い、彼らが医療を受けることを阻んでいる。赤十字国際委員会(ICRC)の依頼で行われた調査によると、推定で半数以上の市民が基礎医療サービスをほとんどあるいは全く受けられない状態である。² 二次医療にいたっては、同国の南部全域の市民に対してあらゆる医療サービスを提供しているのは、ICRCの援助を受けているカンダハルの病院 1 カ所のみである。こうした各種医療サービスを必要とする人びとは、戦闘地帯を通過して数百キロも旅しなくてはならない。サービスを提供する拠点を増やす必要があるのだが、アフガニスタン政府の職員は、武装反政府勢力から標的にされてしまうため、それができずにいるのだ。

MSF は首都カブール市東部にあるアーメッド・シャー・ババ病院とヘルマンド州の州都ラシュカルガにある病院で医療を提供している。カブールでは、パキスタンからの帰還者と、国内他州における戦闘を逃れてきた避難民とが流入し、人口が 4 倍近くに急増した。医療へのニーズは高く、医療がまだまだ行き届いていない現状にもかかわらず、カブールはこれまで、現行の反ゲリラ戦略の重点地域に指定されていないため、ないがしろにされてきた。

ヘルマンド州で高まる情勢不安のため、人びとは医療施設で日常的なケアを受けるにしても緊急ケアを受けるにしても、かなりの難儀を強いられている。その医療施設も、まともに機能していないことが多い。MSF のチームがラシュカルガの病院に到着してからの出来事だが、臨月間近の 1 人の妊婦が、重傷を負って 48 時間も経過してから病院に運ばれてきた。村が爆撃を受けたときに負傷したのだった。妊婦は一命を取り留めたが、新生児は後に敗血症で死亡した。はしかにかかった子どもをつれてきた女性もいた。戦争によって、容易に予防できる子どもの病気に対して予防接種を実施することが、ほぼ不可能になっている現状が浮き彫りになった。この母親によると、村には似た症状の子どもがほかに 8 人いるが、病院に連れて来ることができないという。

¹ United Nations Assistance Mission to Afghanistan (UNAMA), Human Rights Unit, Mid Year Bulletin on Protection of Civilians in Armed Conflict, July 2009
<http://unama.unmissions.org/Portals/UNAMA/human%20rights/09july31-UNAMA-HUMAN-RIGHTS-CIVILIAN-CASUALTIES-Mid-Year-2009-Bulletin.pdf>

² Our World: Views from Afghanistan. Opinion Survey, 2009. Survey conducted by Ipsos for ICRC

* 本稿執筆に際しては、MSF-USA のマニユエル・ラノードとケヴィン・P.Q. フェランの両氏にご協力いただいた。

皮肉にもラシュカルガの病院には、米国・中国・イラン・インドなどさまざまな国々によって、または地域復興部隊を通じて寄贈されたデジタルレントゲン、可動式酸素発生装置、無影灯など先進医療機器が積み上げられている。こうした医療機器はたいてい、ほとんど説明もなくメンテナンスの見込みもないままに病院に置き去られていくのである。ほとんどは梱包から取り出されることもなく、未使用のまま埃をかぶっている。

MSF がアフガニスタン全土で医療を提供し始めてから数十年の歳月が流れた。1980年代には、さまざまな派閥の支配下にある地域のクリニックをつなぐネットワークを立ち上げた。ソ連軍が撤収したあとも、その後の内戦の最中も、タリバンの台頭期・衰退期にも、そして現在の戦闘の初期段階においても、MSF は活動をやめなかった。

しかし、MSF の活動に対する理解を得て当事者に受け容れられることは、アフガニスタンで活動し始めてから常に難題であり続けた。ソ連はわれわれの活動を認めようとせず、のちに MSF 関連の医療施設数カ所を爆撃した。そして 2004 年にスタッフ 5 人が標的にされて殺害されたのを受けて、MSF はアフガニスタンから撤退した。そして 2009 年に現地に戻ると、厳密に公平な医療援助を行うための条件が、消失したといえるレベルにまで悪化している現状を目の当たりにしたのだった。

独立した人道援助の悪化を招いた第 1 の要因は、戦闘のすべての当事者が、医療従事者や医療施設を尊重する気持ちを恐ろしいほど欠いていることである。病院、診療所、医療従事者はタリバンのような反政府武装集団に標的とされ、アフガニスタン政府軍や多国籍軍は医療施設を繰り返し襲撃し、占領してきた。また、これと関係する第 2 の要因は、援助組織のコミュニティが複雑化している今、援助システムが国際同盟に取り込まれて、援助活動と政治・軍事行動の区別がつきにくくなったことである。

つまり、アフガニスタンにおいては中立・独立・公平な人道援助を提供する場所が失われたか、放棄されたか、もしくは奪われてしまったのだ。その結果、市民に悲惨な影響が及んでいる。この場所を奪回し守ることができるか否かが、アフガニスタンだけでなく他の紛争地域における今後の援助の提供にも影響するだろう。

人道援助活動の基盤を失う

*“戦争の真ただ中で
戦争当事者の一方の戦略を推進して国を変えようとする援助組織は
もはや公平な存在とは見られなくなる”*

アフガニスタンでの国際軍事介入は当初、2001 年 9 月 11 日の同時多発テロ事件までアルカイダを受け容れてきたタリバンを壊滅に追い込み、最終的にはアルカイダを打破することにあつた。バラク・オバマ米大統領は、12 月 1 日にウェストポイントで行った演説の中で、「パキスタンとアフガニスタンのアルカイダを粉碎し、解体し、滅ぼし、将来いずれの国での復活も許さない」という公約を再度明言した。米国の国家安全保障上の目標が、いかにしてアフガニスタンでの援助の政治化と手段としての利用に結びついたかを理解するには、米国とその同盟国がアフガニス

タンでの目標達成のために採用した、2つの密接に関係する戦略を検証してみる必要がある。

第1の戦略が前提としていたのは、欧米全体、中でも特に米国の持続可能な安全保障は、破綻した国家、破綻しつつある国家の安定性に左右されるという見解である。その安定性いかんで、貧しい市民の中に過激思想を芽生えさせてしまうリスクがあるからだ。この理論に従えば、紛争解決や平和構築だけでは十分でない。持続可能な安全保障を達成するには、経済発展と、民主主義、人権、司法、優良な統治を育む一貫性ある欧米流の国家建設プロセスがなくてはならないことになる。

救援と開発援助を一つの大きな政治課題にまとめようと試みるのがこの戦略であり、今では、アフガニスタンその他の地域で多国籍軍が採用している3D戦略(Defense「防衛」、Diplomacy「外交」、Development「開発」)を支える一つの柱になっている。ヒラリー・クリントン米 국무長官は、このアプローチを「スマートパワー」と呼ぶ。いわゆるソフトパワーである海外援助を、米国の外交政策と国家安全保障上の国益の促進に役立てようというのが、クリントン 국무長官の言う「スマートパワー」なのである。

第2の戦略は、反政府勢力対抗戦略の一環として、現地市民の「心をつかむ(人心掌握)」という目標の達成に向けて、軍が援助を直接的に道具として使用するというものである。この路線では、市民を支配しつつ反政府勢力への援助を断ち切るため、紛争地帯で公共サービスを提供することになる。

以上2つの戦略が重なり合う部分が、援助を政治・軍事課題に組み込むための複雑な土台となったのである。

2001年12月に国連の呼びかけで開かれたボン会議では、欧米流の民主主義がアフガニスタンに平和と治安をもたらすという点で参加者の意見が一致した。2004年までには、国連も、諸々の国際援助組織が構成するコミュニティも、アフガニスタンを「紛争終結後の」状況にあるとみなすようになっていた。その結果、アフガニスタン政府も資金拠出国も、援助団体に、民主主義の確立に向けたアフガニスタンの取り組みの援護として、国の能力強化活動に力を入れるよう働きかけることになった。³

多くの国際援助組織が構成するコミュニティも、民主主義と優れた統治が平和と安定をもたらすと考えており、米国とその同盟国が掲げる安全保障の長期目標は、これら国際援助機関が開発面、人権面で掲げる理念と共鳴し始めた。

多くの援助団体がこのアプローチを歓迎し積極的に支持した。2003年6月には、米国の主要援助機関を含む80以上の組織が、北大西洋条約機構(NATO)率いる国際治安援助部隊の拡充と、「民主主義を繁栄させ」「アフガニスタン市民と世界が平和と安定の実現に近づくことができるよう」必要な資源の提供を国際社会に要請した。⁴こうした呼びかけを行ったことで、国際援助システムの大部分は、欧米の安全保障政策と手を組んだのである。一部の団体が何十年も前、ベト

³ Afghanistan: Humanitarianism under Threat, Antonio Donini, March 2009

⁴ Afghanistan: A Call for Security, International Council of Voluntary Agencies (ICVA), July 2003

ナムの共産主義政権に対抗するために提携したのと同様似た構図である。⁵

こうして、反政府勢力の壊滅に取り組むアフガニスタン政府と多国籍軍を援助システム全体が支えているというイメージが強まった。このイメージが、ブッシュ大統領(当時)が用いた「対テロ世界戦争」のレトリックと相まって、タリバンなど反政府武装集団の分極化に拍車をかけ、ついには、アフガニスタン政府を援助する国々の組織で働く国際スタッフも国内スタッフも、反政府武装組織から標的とすべき存在と見なされるようになってしまったのだ。

まさに上述の国際組織が、冷戦時代には西側と連携していた。この事実が、国際組織のスタッフを標的とみなす傾向をいっそう強めてしまったのかもしれない。例えば、米国はソ連・アフガン戦争中、アフガンの最も過激なイスラム・ムジャヒディン武装勢力を援助したが、1980年代、MSFその他が米国議会で行った証言が、米国のアフガニスタン政策の策定に一役買うことになってしまったのかもしれない。⁶

平和と安定の追求が崇高な目標であることは疑う余地がない。しかし援助組織が、戦争の真ただ中で戦争当事者の一方の戦略を振興することで国を変えようとするならば、だれの目にも公平な存在ではなくなってしまい、結局は、困窮した人びとと接して援助を提供する能力を失うことになる。こうした理由で、いかなる組織であっても、人道援助の提供と紛争解決の模索を同時に行うことは、ほぼ不可能なのである。

援助の取り込み—隠れ蓑とされる人道援助—

*“議論の余地のない道徳的根拠に訴え、人道戦争として提示すれば、
いかなる議論をも封じ込めることができる”*

フランス軍の将校で学者のデビッド・ガルラが1960年代の半ばに書いたように、対ゲリラ戦は領土の支配をめぐる攻防から民の支配をめぐる争いへと重点を移す。⁷ 軍隊と違ってゲリラは、領土を占領する必要がない。市民の中に潜伏し、対ゲリラ軍相手に、世の中を驚かせるような大作戦を遂行する能力こそがゲリラの強みなのである。

そこで、市民の心をつかんでゲリラへの援助を断ち切ることが対ゲリラ戦の目標になる。アフガニスタンにおける米軍・ISAF軍の司令官であるスタンリー・マクリスタルはこう述べている。「この紛争でアフガニスタンの市民が意味するものは、さまざまである。観客であり、役者であり、影響力の源泉でもある。しかし何といても、獲得すべき目標そのものなのである」⁸

アフガニスタンにおける米国主導の反政府勢力対抗戦略に役立てるための、緊急援助の軍用

⁵ Private voluntary aid and nation building in South Vietnam: The humanitarian politics of CARE, 1954-61, Delia T. Pergande, PEACE & CHANGE, Vol. 27, No. 2, April 2002

⁶ Becoming What We Seek to Destroy, Chris Hedges, May 2009, Truthdig, http://www.truthdig.com/report/item/20090511_becoming_what_we_seek_to_destroy/

⁷ Counterinsurgency Warfare: Theory and Practice, David Galula, 1964

⁸ Commander's Initial Assessment, General Stanley McChrystal, US Army, August 30, 2009

化は、2002年の初頭に具体的な形となって現れた。軍と民間で構成する地域復興部隊の展開である。部隊が当初試みたのは、カブール以外の各州における復興活動の円滑化である。しかしやがて、戦場における「環境的脅威」を中和する任を帯びた「前進作戦」民間組織へと変容した。コリン・パウエル米國務長官(当時)は援助活動従事者を「戦力多重増強要員」と呼んだほどである。

オバマ大統領はアフガニスタンでのこの戦略を続行し強化することを選択した。そして2009年3月には、何百人もの政府機関職員を配置してアフガニスタンにおける非軍事能力を増強するという「文民増派」を発表した。戦闘活動の中で米国国際開発庁(USAID)が担う役割は、アフガニスタンの地域復興部隊と歩調を合わせて活動するスタッフ、展開する業務を大幅に増やすことで強化された。

マクリスタル司令官とカール・アイケンベリー米駐アフガニスタン大使が2009年8月に練り上げた「アフガニスタン支援のための米政府統合民軍計画」(U.S. Government Integrated Civil-Military Campaign Plan)には、同じ州で活動しているすべての民軍部隊は、民間の援助団体を含むあらゆる米国組織、国連、同地で活動するアフガニスタンのパートナーの行動を調整し、足並みをそろえさせるべきだと書かれている。⁹

こうした状況下の援助は、「ニーズに基づく」ものではなく「脅威に基づく」ものになる。つまり人道ニーズの公平な評価に基づいて差し出すのではなく、軍事的な目標に合わせて提供されるものとなる。こうして援助は、軍用に供される武器の一つとなる。達成課題とする安全保障上のより大きな目的に資する者、そうでない者に向けて、軍が条件をつけたり拒んだり褒美として与えたりして使うことのできる武器になってしまうのだ。その中でも特にひどい事件は2004年に起きた。多国籍軍側は、住民に配布したチラシの中で、アルカイダとタリバンの指導者に関する情報提供がなければ援助を打ち切ると脅しをかけたのだ。

統合民間機関からの情報収集もまた、反政府勢力対抗戦略の目標達成の手段となっており、公平な人道援助を行える場所を侵食している。パキスタン・アフガニスタン問題を担当するリチャード・ホルブルック特別代表が最近の発言の中で確認している。彼は、アフガニスタン、パキスタンに関する情報の大半は現地の援助団体から得ていると述べたのだ。¹⁰この発言に、国際援助界の多くの組織が憤った。援助機関は米国のスパイであるかのような認識をいっそう強めてしまうからである。

中立の人道援助機関のシンボルとして認知されているものを軍が乱用することによっても、軍事的な意図と援助の意図の混同につながる。例えば NATO が白い車を使用しないことに合意したのはごく最近である。白は中立性、独立性の色として一般に認識されているのだ。NATO が白い車を使わなくなったといっても、軍が心理戦を勝利に導き部隊を守ろうとする中で、今後は「人道の隠れ蓑」を使わなくなると安心するのは、考えが甘いだろう。

援助を道具として使い、人道の責務を引き合いに出すことは、軍にとってさらなるメリットがある。

⁹ <http://www.comw.org/qdr/fulltext/0908eikenberryandmccrystal.pdf>

¹⁰ Envoy laments weak US knowledge about Taliban, Robert Burns, Associated Press, April 07, 2009

本国での世論を巧みに誘導し、政策担当者らが国外で戦争を遂行するための口実となるのだ。議論の余地のない道徳的根拠に訴え、人道戦争として提示すれば、いかなる議論をも封じ込めることができる。具体的な目標は何か、介入する国、される国にとって武力介入の代償と利益はそれぞれ何なのか。こうした議論を排除することができるのだ。ソマリア、イラク、旧ユーゴスラビアにおける 1990 年代の戦争は、どれも人道の名の下に戦われたが、おそらく最も端的な例だろう。オバマ大統領はノーベル賞受賞講演の中で、「バルカン諸国をはじめ戦禍を負った地域の例に見られるように、武力行使は人道的根拠によって正当化される」¹¹ という信念を繰り返し訴えた。

戦場に引きずり込まれる医療施設

*“医療サービスを必要とする人たちは
重大なリスクを冒して紛争地帯を通り抜け、
医療施設にたどり着かなくてはならない。
その医療施設も、往々にしてまともに機能していない”*

アフガニスタンの保健衛生指標の一部は、世界最悪である。¹² 乳児死亡率、妊産婦死亡率が飛び抜けて高いのである。何らかの医療サービスを必要とする人たちは、生命の危険を冒して紛争地帯を通り抜け、医療施設にたどり着かなくてはならない。その医療施設も、まともに機能していないことが多い。MSFがラシュカルガの病院で調査したとき、乳児死亡率は 30%であった。病院にスタッフがいないため、そして、患者が病院に到着することには、症状が命を脅かすほどに悪化しているためである。

内戦と対ゲリラ戦は市民を味方につけるための争いであるため、医療サービスの提供(または提供拒否)は紛争当事者すべてにとって重要な資産の一つとなる。こうしてアフガニスタンの戦争当事者たちは、医療従事者と医療施設を戦場の一部とみなすようになっている。

例えば反政府武装集団は自分たちの戦略的な理由で、これまで医療施設と医療従事者を標的にしてきた。2009 年 5 月には、ホースト州のナディール・シャー・コットにある診療所が武装集団によって破壊され、スタッフが脅迫された。そして 11 月には、戦闘員とみられる者たちがカンダハル州南部のダマン地方で診療所を焼き払った。¹³¹⁴ 反政府武装集団はまた、援助活動従事者の殺害、襲撃、誘拐に関係しており、簡易爆発物(IED)を使った事件も増えている。¹⁵

8 月の終わり、反政府武装勢力の指揮官の 1 人が治療を受けているとの報告をもとに、アフガニスタン軍とNATO軍がパクティカ州のある診療所を襲撃した。上空からヘリコプターが建物を援護

¹¹ <http://www.google.com/hostednews/ap/article/ALeqM5iRWjTDaT4JuS0nFj9APZAues8vjAD9CGFID00>

¹² World Health Statistics 2009, World Health Organization

¹³ [http://www.afgnso.org/2008%20week/THE%20ANSO%20REPORT%20\(16-31%20May%202009\).pdf](http://www.afgnso.org/2008%20week/THE%20ANSO%20REPORT%20(16-31%20May%202009).pdf)

¹⁴ www.khabaryal.com, Afghanistan, November 23, 2009

¹⁵ ANSO Quarterly Data Report, Q.3 2009, <http://www.afgnso.org/2008/ANSO%20Q.3%202009.pdf>

射撃するなか、12人の反政府勢力戦士を殺害した。¹⁶その1週間後、ワルダック州でスウェーデンのアフガニスタン援助委員会が援助している病院を、今度は米軍が襲撃した。兵士らは病院内を捜索し、寝たきりの患者を病室の外に出し、病院スタッフや来訪者を縛り上げさせた。そして病院を立ち去る際、反政府勢力兵士の疑いがある者を入院させるときには多国籍軍に報告するよう病院スタッフに命令を発した。同月、ヘルマンド州保健部門の責任者が、アフガニスタン軍と米軍によるミアンポシュタの診療所占拠を非難してこう語る。「人びとは怖気づいてしまって、診療所に行こうとしません」。こうして今、診療所は閉鎖されている。

アフガニスタンでの「文民増派」により、援助活動従事者は多国籍軍や民間の警備会社などいろいろ武装人員から警護してもらう必要が生じた。こうして兵士や傭兵など実にさまざまな人員がマシンガンを持って病院内を自由に歩き回る結果となり、医療施設はさながら戦場と化した。国の諜報機関であるアフガニスタン国家治安局の職員もまた、ひんぱんに患者を尋問したり逮捕したりしており、医療スタッフと患者の間の守秘義務を損ねている。

もちろん、軍の部隊が援助活動にかかわることもある。しかし活動遂行に際しては、例えば自分たちの制服を着用するなどして自らの身分を明確にする必要があるし、援助活動従事者が働いている施設の中立性を尊重しなければならない。

けが人と病人のために安全な空間を作るという人道上の責務に加えて、ジュネーブ条約にも規定されているとおり、医療施設や医療スタッフに対する敬意を要請することで、実務上の重要な効果も得られる。医療施設が戦術上の標的になった結果として、市民への医療提供ができなくなるという事態に陥らないように徹底できるのだ。

不明瞭になる人道援助活動の原則

*“人道援助活動がただ一つ抱く大望は
戦線のどちら側に居合わせた人であれ、
その人がむごたらしくない状態で命をつなぐことができるよう力を添えることで
戦争による荒廃をくいとめることである”*

2009年6月、米軍は軍と非政府組織との間に「文化的な隔たり」があると考え、その隔たりの解消に向けてウェストポイントで会議を開催した。そして会議に、アフガニスタンでの緊急救援や開発活動、紛争解決活動に携わっているさまざまな組織の代表を招いた。会議に先立って配布された会議の背景説明の文書には、双方が相互理解に努めなくてはならないとあった。双方には「崩壊の瀬戸際にある国々において紛争を防止し安定を築くという共通の目標」があるからだと記されていた。

この文言は、人道援助活動の原則について根本的な誤解があることを物語っている。人道援助活動と軍事活動の隔たりは、そもそも国際人道法に照らして解消可能な溝ではないのである。MSFなどの人道組織が軍と同じ領域で活動する場合もあるだろうが、その目的は異なっているのである。

¹⁶ Fury at Nato's Afghan clinic raid, BBC, August 28, 2009

戦争地帯で緊急医療援助を提供するからといって、MSF が平和主義団体であることにはならないし、紛争当事者が追求する戦争の目的の正当性を判断する立場にもない。我々は特に患者、医療倫理、医療スタッフ・施設の尊重などに関して国際人道法の厳守を要請するが、我々の目的は、戦争を終わらせ平和を築き国家を建設し民主主義を推進することではない。人道援助活動がただ一つ抱く大望は、戦線のどちら側に居合わせた人であれ、その人がむごたらしくない状態で命をつなぐことができるよう力を添えることで戦争による荒廃をくいとめることである。

公平な人道援助は、あらゆるコミュニティ、あらゆる戦争当事者からの受け容れられることなくしては成り立たない。国の政府であれ、武装反政府運動であれ、多国籍軍であれ、さらには犯罪組織であれ、とにかくすべての当事者から受け容れられる必要がある。すべての紛争において我々は、活動できる場所を交渉で確保し、ただ命を救うための医療援助を提供したという願望に突き動かされているだけだということを行動で示してその場所を維持していかななくてはならない。援助活動従事者に援助と保護が自動的にもたらされた黄金時代を懐かしむのは、単なる夢にすぎない。アフガニスタンも例外ではないのだ。

さまざまな目標を掲げる援助機関が増えている。救援、開発、人権、紛争解決、市民社会の振興、司法、法による支配。数々の目標を組み合わせる組織もある中で、中立性、独立性、公平性を掲げることは、ときには偽善的に映ることも、それどころか、組織自体が抱く純粋さの幻想を助長するための呪文のようにさえ感じられることもあるだろう。

開発と国家建設の取り組みの統合に参画したいと考える組織は、「中立性」を捨てていわゆる「実地的」アプローチを採ることが往々にしてある。そうしたアプローチの採用は、より明るい未来を実現するために、目の前にあるニーズに対応する能力を犠牲にしようという選択である。

救援と開発援助の間に根本的な対立があるわけではない。しかし、特に紛争が続いている場合には、両者を区別する必要がある。意図が何であれ、紛争の真ただ中で開発計画や国家建設計画の推進にかかわる組織は、紛争当事者の一方に味方しているとみなされるだろう。公正な人道援助を行う場所を確保するため、戦争地帯において複数の責務を掲げる組織は、救援と開発援助のどちらかを選ぶべきである。今日救える命を救うのか、それとも明日の社会を救うのかの選択である。

「独立性」もやはり、財源を確保する必要によって損なわれる。多くの援助組織が国からの資金提供で存続しているのである。こうして資金拠出国が過度の影響力を持つようになり、援助を取り込んで自らの政治的ニーズの推進に用立てようと図るのだ。援助の受け手は、援助活動従事者の意図に疑念を抱くようになる(例えば、パキスタンで活動する MSF のチームは昨夏、避難民から「活動資金はどこから出ているのか」とたびたび質問された)。アフガニスタンでは、欧米の援助組織に資金提供している国の大半は、多国籍軍にも参加している。しかし金銭的に独立してさえいれば、自動的にその組織が中立の機関、公平な機関となれるわけではない。そうなるのは、行動を通じてのみである。

最も困窮した人びとに手を差し伸べる苦闘の中で、人道援助従事者が持った一つの道具は、意図の明瞭さと透明さだけである。今日のアフガニスタンのような地域における援助システムには、多種多様な援助団体がずらりとそのアルファベットによる略称を連ねている。そんな諸団体を区別するのは容易でないため、人道援助活動は、最低でも、中立性、独立性、公平性を実践

で示さなくてはならない。その代償として恐らく、主流の援助界から距離を置かなくてはならないだろう。しかしそれでも、人道援助従事者の身の安全が保障されるなどという幻想を抱いてはならない。どんな戦争においても、援助従事者は本来的に、攻撃を受けやすい立場にあるのだ。

人道の責務と拒否の倫理

*“目の前にある苦しみの緩和を目的としない
集団的統合的活動への参加を拒否する”*

アフガニスタンにおける人道援助活動は、これまでアフガニスタン市民と紛争の各当事者から受け容れられ、その受容を頼りに20年以上にわたって行われてきた。しかし今日、その受容はもはやない。その結果、アフガニスタンの大半の地域では、救援活動を行う力も失ったのである。

政治・軍事関係者が人道援助を道具として使い、対ゲリラ戦における目標追求に役立てたことが、この状況の変化の大きな要因となった(そして名実共に、軍による医療施設の占拠に結びついた)。国際援助界の大部分が、自発的にせよそうでないにせよ、こうした援助の取り込みを支持してきた。援助は、人命救助という基本的人道責務を越えて、国家建設、平和、開発というもっと大きな目的に向けられるべきだと考えて、政治・軍事関係者による人道援助の取り込みを支持したのである。

こうしたアプローチが人道援助の原則を傷つけ、人道援助を提供するために必要な活動場所を狭めてきたのだ。救援と開発はどちらも善意で行われるのかもしれない。そして相反するものでもないのだろう。しかし戦時下で、両者の間に運営上相容れない重大な相違があるのだ。

人道援助の原則は、援助従事者にとって不可欠な前提条件である。また紛争当事者の全員から人道援助活動に対する敬意を勝ち取る手助けともなる、実用的な道具である。中立性、独立性、公平性は、負傷した民間人や派閥の異なる非戦闘員が命を救う医療を求める救急処置室では極めて重要であっても、道路や学校の建設や法の支配の推進のためには、確かにそれほど決定的に重要な意味を持たないだろう。しかし救急処置室においてこの原則が損なわれると、医療施設、患者、医療スタッフが意図的な攻撃を受け、結果的に、戦争によって身動きの取れなくなった市民すべてが医療サービスを受けにくくなるのである。

仮想共同体利益の名の下に、一部の人類の早すぎる死、避けようとするれば避けられるであろう死を正当化するロジックがある。¹⁷MSFはそのようなロジックに断固反対する「拒否の倫理」をベースに、その行動とアイデンティティを形成してきた。今日のアフガニスタンで、MSFは再び、目の前にある苦しみの緩和を目的としない集団的、統合的活動への参加を拒否する。これまで8年間に及んだ戦争ののち、アフガニスタン市民に向けた救急医療は、戦争当事者らの思惑に左右されるべきでない。

¹⁷ The Sacrificial International Order and Humanitarian Action, Jean-Herve Bradol, In the Shadow of “Just Wars”, Cornell University Press, 2002

北大西洋条約機構(NATO)会議における

MSF インターナショナル会長による講演

(2009年12月8日)

2009年12月7～8日、MSF インターナショナル会長のクリストフ・フルニエは、北大西洋条約機構(NATO)の欧州連合軍即応部隊(ARRC)がドイツのラインダーレンで主催した会議において講演した。

ARRCは2006年5月から2007年2月までNATOのアフガニスタン国際治安支援部隊(ISAF)を指揮し、ボスニア・ヘルツェゴビナの和平履行部隊(IFOR)やコソボ治安維持部隊(KFOR)、さらにイラクにおける軍事作戦にも参加してきた。NATO および英国国防軍に加えて、各国政府、国連、NGO、マスコミ、学界、そしてEUの代表者が一堂に会した今回の会議の目標として掲げられたのは、合同ミッション(複数の主体が単一の構造の下で軍事、警察または文民の要員を展開する平和活動)における「目的の一致」を実現するために文民および軍の取り組みを一体化させる最善の方法を検討することであった。

講演の中で、フルニエ会長は、なぜ国境なき医師団(MSF)による「軍事的人道連合」への参加があり得ないのかについて理由を述べ、MSFのような公平な人道援助団体と、その他のより特定の主義などに偏った人道援助団体とを区別することの重要性を説き、最後に、こうした区別が明確でないと、現地の人びとに悪影響を与えることを説明した。この会議は、MSFの信じるものが「目的の一致」ではなく、「すべての紛争当事者との相互理解」であること、そしてこれがあって初めて、戦争による荒廃をくいとめるための公平な援助活動が可能になるとの見解を示す場となった。

NATO 会議における講演(ドイツ・ラインダーレン 2009年12月8日)

人道援助団体の集まり以外の場所で、MSFのかなり稀な特徴を共有する方々で埋まった会場に私が招かれてお話をするのは珍しいことです。皆さんも、そしてMSFも、紛争地に赴くことを求められる仕事をしています。NATOは過去数十年にわたっていくつかの戦争に参加、MSFはあらゆる戦争の地に赴いてきました。MSFはコソボ、シエラレオネ、アフガニスタン、ダルフル、アンゴラなどの大規模な紛争、そして現在の中央アフリカ共和国における紛争やインドの武装革命主義者グループ、ナクサライトの反乱など、あまり取り上げられない紛争地でも活動しています。私たちはこうした点を共有していますが、それ以外の点については、おそらく人びとが一見して考える以上に異なっているのではないのでしょうか。

講演にあたって、まず極めて人道主義的なことから話を始めたいと思います。私は自分が弱い立場にあると考えます。皆さんは甚大な軍事力を代表しておられますが、私は一介の医師であり、援助活動従事者に過ぎません。このことによって、私は自分を非常に弱い立場にあると感じていることを申し上げておきます。

私は、そのことで不安になってはいません。皆さんが暖かく迎えてくださったことに加えて、私は人道援助従事者として弱い立場に置かれることに慣れているからです。そしてMSFよりもはるか

に弱い立場にある、MSF が助けようとしている人びとに慣れているからです。おもしろいことに、人道援助従事者であるという立場の弱さが、私たちを守ってくれるのです。MSF にとって、こうした弱さは、聴診器、医薬品、包帯、そしてニーズに応じてのみ緊急医療援助を届けるという公約で武装した私たちの存在に根差しています。

あらゆる国の人びとが、私たちの立場の弱さの中に、医療援助の原動力となっている人としての思いやりを認め、それによって私たちを信頼してくれます。こうした信頼関係を築くことができると、私たちを常に監視している完全武装の兵士でさえ信頼を寄せてくれます。危機的状況にある人びとのもとに赴くために長い道のりを土埃をあげて走り回る医師や看護師を信頼してくれるのです。彼らは自分の健康や大切な人を MSF の熟練したスタッフに委ねてくれます。こうした信頼が、MSF の人道援助プログラムの中核に位置しています。こうした信頼が、私の講演の重要なテーマです。

私は自分が弱い立場にあることに不安を抱いていませんが、こうした信頼が損なわれることを懸念しています。私は皆さんが、自らの目標達成に極めて重要だとお考えの「目的の一致」について憂慮しています。MSF はこうした「目的の一致」は信頼を損なうものであると確信しています。これは MSF の人道援助団体としての誠実さに疑念を生じさせるものです。人びとが私たちの活動の動機や目的を疑いかねないからです。私が不安に思うのはこうした理由のためであり、それが本日ここでお話しさせていただきたいテーマでもあります。

MSF は世界 60 カ国以上で医療・人道援助を提供しており、非常に多くの活動を行っています。2008 年に行った活動の例を挙げましょう。

- ・ 外来診察およそ 900 万件、入院治療 30 万件以上
- ・ 外科手術 4 万 7000 件以上
- ・ 重度の急性栄養失調児 21 万 2000 人の治療
- ・ (ジンバブエ各地でコレラが爆発的にまん延した際には、10 万人を超える患者の 75% に対処)

こうした数値は、NGO としては、かなり大きなものです。特に、その背後にいる人びとや患者の存在を知っている MSF にとっては意味のある数値です。しかし、MSF の会長として、私はまだこれらの結果には満足していません。例えば、ソマリアにおける MSF のプログラムは、戦争によって破壊された地域社会の膨大なニーズに対処するために拡大できずにいます。ダルフル、パキスタン、イラクといった深刻な紛争地では、意味のある活動をするために懸命の努力を重ねていますが難航しています。そして特にアフガニスタンでは、病気、栄養失調、けがに苦しむ何万人もの人びとが緊急の人道援助を求めているにもかかわらず、それを届けることができていません。

2004 年にバドギス州でスタッフ 5 人が殺害されるという事件が起こるまで、MSF は 1980 年からアフガニスタンで継続的に活動を行っていました。2000 年代に入り、MSF は全国半数の州で活動を行っていました。しかし、事件が起き、活動の縮小を余儀なくされています。最近になって、首都カブール市東部にある病院とヘルマンド州の州都ラシュカルガにある病院でプログラムを開始しました。アフガニスタンで MSF の活動が制限される原因は数多くありますが、その一つが、この会議のタイトルにもなっている「目的の一致」という概念なのです。

話を進める前に、MSF は反戦主義者でも反軍主義者でもないことを明言しておきます。10 年前

にノーベル平和賞を受賞した団体としては奇妙なことと思われるかもしれませんが、MSF は平和主義者ではありません。皆さんや、皆さんの敵といった特定の集団の目標に対する価値判断に踏み込むことはありません。私たち、MSF と NATO は、どちらも同じ一触即発の地域に足を踏み入れています。ですから、厳しく緊迫した戦争地帯での共存という現実に対処しなければなりません。決して共通の理解は得られないとしても、私たちは相互理解を深めて、互いの動機、責任、戦略、そして目的について十分に理解する必要があります。

【1】 MSF の目的は、戦争による荒廃をくいとめることです

私は MSF のアフガニスタンへの派遣チームとこれまでに何度も話しましたが、MSF と NATO が接触する機会(ほとんどの場合は良好な、建設的な接触です)においては必ず、NATO の代表者が最後に「少なくとも私たちは同じ目的を共有しています」というようなことを言われるようです。戦場の司令官の発言か、ブリュッセルの政策立案者の発言かは問題ではありません。「少なくとも私たちは同じ目的を共有しています」これはどういう意味でしょうか。この発言によって、MSF のだれもが、誤解されているという気持ちを強く抱くことは間違いありません。

困惑し、操られながらも(これについては後に述べます)、MSF は人道援助プログラムとはかなり単純で非常に限定的なプログラムであると信じています。MSF の目的は、人びとが戦争による荒廃を生き延びるための手助けをすることです。つまり、最も援助を必要としている人びと、紛争の危機に巻き込まれ、病気、けが、飢え、深い悲しみ、そして恐怖に苦しむ人びとを見つけ、ケアを提供することです。MSF は命を救い、苦しみを和らげる援助を現場で直ちに提供することによって、こうした人びとに対応しています。

先ほど申し上げたとおり、MSF の望みは限定的なものです。MSF の目的は戦争を終わらせることではありません。国家を築いたり政府の正当性を確立したり、政府の体制を強化したりすることは人道援助活動ではありません。民主主義や資本主義、女性の権利を普及させることでもありません。人権の擁護や環境保護でもありません。人道援助活動は経済開発、紛争後の復興、または実際に機能する医療制度を確立する活動とは無関係です。あくまで、目下の事態に対して命を救い、苦しみを和らげる活動なのです。この点で、MSF と NATO の考え方は根本的に異なっています。現在 NATO がアフガニスタンで行っていることは、将来のアフガニスタンのための活動であるのに対し、MSF は今現在のアフガニスタンのための活動を行っています。MSF は人びとを治療し、癒すことを目的に活動を行っています。

先ほど挙げた国の復興や民主主義の普及といったその他の活動はみな、称賛に値するものでしょう。まさに NATO とその加盟諸国がアフガニスタンで推進すべき種類の活動であると言えるかもしれません。しかし、こうした目的や活動は、人道援助活動の分野には入りません。確かに関係はあるかもしれませんが、別のものです。さらに重要なことに、人道援助活動の目的や活動が、こうしたより幅広い、より将来に向けた課題とひとまとめにされると、その直接的な結果として混乱と矛盾までもが引き起こされます。間接的な結果としては、紛争に巻き込まれた一般市民が、受ける権利があるはずの援助を受けられなくなるという事態が生じます。

どうか、MSF の今日の位置付けと道徳的判断や優位性といった感覚とを混同しないでいただきたい。MSF は、アフガニスタンのような場所で軍事目的よりも人道目的の方がより崇高であると信じているわけではありません。NATO が今後 100 年間アフガニスタンに駐留するにせよ、明日

撤退するにせよ、タリバンが政権を奪還するにせよ、そのことの是非についていかなる意見も持っていない。言い換えれば、MSF は NATO の味方ではありませんし、いかなる側の味方でもありません。これが中立性の原則です。MSF は、活動の正義や残忍性にかかわらず、いかなる紛争当事者の敵味方につくこともありません。これは NATO の立場に反するものです。

【2】 すべての紛争当事者から受け容れられるように MSF は「中立・公平」という原則を約束しています

人道援助とは、紛争の最前線やその当事者については敵味方の区別なく個々の人間に対して提供されるべきものです。人種、宗教、民族、あるいは国家や主義に対する忠誠は関係ありません。これが公平の原則であり、人道援助活動の必須条件です。公平であるという義務は、「公平な人道援助団体」に特定の権利と保護を与えたジュネーブ条約によって人道援助団体に課せられたものです。公平、つまり MSF はあらゆる一般市民のもとに赴き、最も援助を必要としている人びとを特定し、治療できなければならないのです。当然、活動の場所と方法は MSF が独自に行う医療ニーズの調査に基づいて決定されるのであり、さらに当然のことながら、情勢の安定化、復興、国家の建設、人心の掌握、軍隊保護、あるいは帰還した人びとからの支持の獲得などに基づく余地などありません。

私たちは恰好の標的ですが、このため、私たちは人びとのもとに赴くためには現地の地域社会からだけでなく、各国政府、反政府武装勢力、国際部隊、民間の治安部隊、犯罪組織といった、紛争地域のあらゆる武装勢力からも受け入れられる必要があります。MSF はこれらの各勢力から、有益なサービスを提供する中立的医療援助団体、つまり将来的な計画などもたない、命を救うための援助を提供する団体であると認めてもらわなければなりません。

実際の公平性と中立性はもちろん重要ですが、MSF はこれらの原則に対する認識も等しく守らなければなりません。そのために独立性とその認識が非常に重要なのです。もし MSF の活動が皆さんの国の政府から資金援助を受けているとすれば、タリバンに MSF の中立性を納得させられるでしょうか。逆にタリバンから資金援助を受け、ロンドンやニューヨークやコペンハーゲンで活動する医療援助団体を想像できますでしょうか。皆さんの国の政府は疑い以上のものを抱き、そうした団体に厳しい措置を講じるのではないのでしょうか。そう考えれば、現在のアフガニスタンにおいて MSF が受け容れられることの難しさをおわかりいただけるでしょう。こうした理由で、MSF は西側諸国、特にアフガニスタンの紛争当事国の政府からの独立を貫いています。これは財政、物流、運営上の独立であると同時に、目的の独立でもあります。

【3】 「人道的戦争」「軍事－人道提携」という発想は 人道援助活動の中核となる概念や活動方法と完全に矛盾するものです

受け容れられることと活動地に赴くことへの挑戦は、マクロレベルで、つまり援助活動の開始そのもののレベルで始まります。軍隊による援助への関与は今に始まったことではなく、以前から暴動鎮圧作戦の標準要素であり続けてきました。また2004年12月にスマトラ島を襲った津波のような自然災害への対応策として利用されるようになっていきました。しかし、大まかに「人道的戦争」として分類され、軍隊が派遣される例が次第に増えています。この概念は、独立を目指すセルビアのコソボ自治州に NATO が介入したときから、より明確になりました。

いかなる武力介入も、最終的には国際平和と安全への脅威を根拠としなければなりません。しかしコソボでは、公の論調が変えられ、外国による軍事侵攻は、人びとの苦しみに対応する人道目的であるという点が強調されました。軍隊は主としてセルビアからの大勢の難民に対する援助提供者であるとされました。MSF にとって、「人道的戦争」という概念は人道主義の理想の危険な改変です。人道援助を届けるためには暴力の使用も正当とする意見を支持するものだからです。また、大きく異なる2つの人的努力を混同する概念でもあります。

(この好戦的な「人道的」介入は、奇妙な歴史の逆戻りを起こしました。人道援助活動の当初の目的は、戦闘員と非戦闘員との区別を通じた「戦争の文明化」でした。しかし現在は「文明化のための戦争」を行うに至っています) MSF のような人道援助団体は戦争に反対してはいませんが、MSF は援助を届けるにあたり非暴力的な行動様式をとるよう最大の努力を払っています。「食糧援助のために発砲する」あるいは「医療援助のために発砲する」ことは、私たちのやり方とは相容れません。

MSF は、さまざまな国や NATO のような組織にとって、外国への介入、特に戦争への介入にあたっては市民からの支持と政治的合意が必要であることを十分に理解しています。この点については人道的な説明が非常に有効でしょう。よく似た普遍的な価値を感情的に訴えかけることができるのですから。しかし、結局、軍事介入を人道援助活動のように装うことは、2つの相反するものに連続性を生み出すこととなります。片方の極には、緊急医療・人道援助サービスの公平な提供。もう片方の極には、体制変革、外国による占領、和平工作、国家建設、そして暴力といった政策。こうした連続性は信頼を損なうものです。

【4】 すべての紛争当事者から受け容れられることは 国連や西側諸国の軍隊が関与している紛争においては より困難な傾向にあります

国レベルにおいて、例えばアフガニスタンのような国においては、現地に受け容れてもらうことと活動地に赴くことの難しさは、顔に鼻があるのと同じくらい必然のことになっています。私たちの経験では、一般常識に反して、すべての紛争当事者から受け容れられることは、国連や西側諸国の軍隊が戦闘に関与している場所において、より難しい傾向にあります。一方に偏った援助は、一方に偏った活動地に赴くことを意味します。今日のアフガニスタンは、こうした難しさがよく表れた例です。

アフガニスタンで信頼関係が壊れてしまう理由は、MSF という組織が、皆さん NATO の指揮している軍隊の派遣を決定し、資金を提供し、補給を行っているまさにその国々で誕生したという事実にあります。要するに、MSF は戦闘服を着ていないというだけの違いで、あとは皆さんと同じだと思われるのです。政治的にも軍事的にも深く関与しているそれぞれの出身国からは独立して活動するという MSF の主張は、当然、国際社会による介入に反対する勢力を筆頭に、現地のさまざまな勢力から強い疑念を抱かれています。

こうした信頼の欠如は、国連や西側諸国の軍隊が「人道的」目標の達成を促進するのに軍事力を利用すると主張し、それにより一方的に人道援助 NGO と介入/占領軍との間の「目的の一致」を宣言する場合に、ますます強くなります。2001 年には、ほかならぬ当時のコリン・パウエル米国防務長官が「NGO は私たちの力を増強してくれる存在であり、私たちの連隊戦闘部隊の非常に

重要な部分を占めています」との声明を発表しました。さらに悪いことに、人道援助団体は情報源であると言及されたこともあります。もし私たちが皆さんのチームの一員であり、味方であり、情報提供者であり、皆さんと同じ目標に向かって進んでいるとしたら、私たちが直接反対勢力の標的となることは言うまでもなくわかりでしょう。MSF は、こうした結束には参加できません。

地域レベルでさらに言えば、アフガニスタンのような場所では、私たちと同類の NGO による活動が、今お話しした役割と目的の混乱に拍車をかけています。援助のシステムは非常に多様です。援助団体の大多数は、戦争による荒廃の抑制よりも、さらに広範な目標を掲げています。人道援助団体と名乗りながら、実際には和平、良い統治、正義、持続可能な開発、男女平等、などを目指している場合が多いのです。アフガニスタンでは、このような団体の多くが紛争当事者のいずれかから資金提供を受けています。つまり、こうした資金提供によって自国の外交政策目標を直接推進すると公言している援助政策をもつ国々の政府から資金提供を受けているのです。

こうした枠組みの中では、援助団体は国際社会による戦争の準備や一方の側のみの国家建設政策に寄与しているという考えを抱くことは容易に理解できることです。アフガニスタンでは、国連と NGO による援助システムの巨額の資金がアフガン政府と西側の介入部隊の目的を支えています。批判的に見れば、アフガニスタンにおける援助システムは、皆さんの反政府勢力対策、和平工作、および国家建設政策の実行にあたってのパートナーとして作用しているのです。

NGO と国連だけではなく、軍隊のような援助以外の活動に従事する関係者も、巨額の資金を援助の提供に費やしています。基本的に、皆さんは自分たちを人道援助プログラムの一部であるかのように見せています。繰り返しますが、MSF は皆さんの行動方針について評価を下すことはしません。しかし、そこについてくるものがあります。

重要なことに、MSF が抱く人道主義の完全性への懸念以上に、実際的な問題があります。すなわち、現地の人びとに対するマイナスの影響です。人道援助プログラムが軍事に組み入れてしまうと、活動のやり方においても一般大衆からの認識という点においても、人道援助プログラムは軍事目標になってしまいます。

特定の病院や医療プログラムなどを軍事に組み入れる動きは、実際に行われていることかもしれません。例えば皆さんの武装チームが安全を確保したり、そのチーム自身で医療を提供したりする場合などです。あるいは、軍事に組み入れられてはいなくても、他の場所の例に影響されてそうした認識がなされている場所もあるでしょう。いずれにせよ、結果は致命的です。問題なのは、どこかの学校、医療施設、援助輸送隊が一方の側によって軍事に組み入れられると、それらはすべて反対勢力の標的になり得るという点です。いかなる人道援助 NGO でも、こうした条件の下では活動できません。

アフガニスタンでは、こうした危険な現象が明らかとなる機会が多数あります。国際治安支援部隊(ISAF)が医療施設やスタッフを保護したことで、そうした医療施設は対立する武装勢力間の戦場と化しました。その結果、医療を必要とする患者たちが、こうした施設に行くことを恐れるようになりました。施設への攻撃を恐れているのです。また、そうしたサービスを利用したことへの報復も懸念しています。そのため、数多くの地域で、人びとは治療を受けられずに苦しむ子どもを前に手をこまねいているか、対立する武装勢力に襲われる危険を冒して夜間に診療所を訪れるかという無理な選択を迫られています。

MSF にとって、自ら運営する医療施設内の安全を確保し、緊急援助を必要としている人びとのもとへと赴くための鍵は、軍事力ではなく交渉です。そのため、MSF は活動する施設や車両の中を徹底して「武器持ち込み禁止区域」とし、MSF の医療施設、救急車、事務所、宿舎を「非武装の聖域」として、戦闘も、警察も、情報収集活動も立ち入れない場所として認めるという確約をすべての紛争当事者から得るという方針を掲げています。

【5】 国連や NATO、不朽の自由作戦*、アフガニスタン政府寄りの援助システムの不公平性、および軍の部隊による援助活動への直接関与は、人びとが基本的なサービスを受ける機会を脅かすものでない限り非難されるべきものではありません

先ほど述べたとおり、MSF は「人道的戦争」という概念に反対です。また、援助活動を軍事目的として位置付けることにも批判的です。驚かれるかもしれませんが、MSF には軍の部隊が戦争の取り組みの一環として援助を提供することに反対する主義主張はありません。私たちは、援助が人心掌握作戦や国連アフガニスタン支援ミッション(UNAMA)の一部であったり、援助団体がアフガニスタン政府を援助したりすることに反対する主張もありません。

ただし、2 つの点を強調したいと思います。第 1 に、反政府勢力対抗戦略を助けるために、または国家を建設するために行われる援助活動は、援助に対するニーズだけに立脚しているわけではないため、公平であることができません。こうした援助は「人道的」という言葉と結び付けられるべきではありません。第 2 に、最も重要な事ですが、反政府勢力対策・国家建設を目的とする援助政策は、アフガニスタンのような紛争の状況下にある一般市民の極めて重要なニーズをほとんど満たすことができていません。

他の優先事項によって指揮されているため、援助が最も必要としている人びとに届かないのです。例えば、アフガン政府とその同盟国の軍事的・政治的優先事項は、今日のアフガニスタンを十分に守るものではありません。首都カブールでさえ、国際社会の援助を受けた公共の医療施設の水準は極めて不十分です。なぜでしょうか。カブールの人口は 2001 年から 4 倍に増えたのに、反政府勢力対策という観点からは、この事は優先事項ではないためです。

紛争の一方の側の味方という立場と、NATO 加盟国からの資金提供を鑑みれば、今日のアフガニスタンではほとんどの援助団体が対立する武装勢力から事実上の標的と見なされます。そうした団体からの援助が、現地の地域社会から絶対的に必要とされていることは問題とされません。その結果として、国の至るところで対立が拡大した 2006 年以来、アフガニスタン市民の大多数は、援助提供者の手が届かない状況にあります。これが、私たちが皆統一された目的を共有しているという認識の帰結です。

*不朽の自由作戦：2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件の報復として、国際テロ組織アルカイダ隠匿の疑いがあるとされたアフガニスタンのタリバン政権に対して、アメリカ合衆国と英国が 2001 年 10 月 7 日に開始した軍事作戦の総称。

終わりに

最後に、私たちの組織の独特な役割や機能について重要な意見交換の場を与えていただいたことに感謝します。ただ、本日の MSF の立場は、皆さんにとって不公平だと思われることも理解しています。この講演はどちらかといえば、独白に近いものでしたので。私たちは組織間での対話を歓迎します。いつでも MSF のシニア・オペレーション・ディレクターの 1 人アルヤン・ヘヘンカンプト、私に話をしにいらしてください。

講演を終える前に、これまで述べてきたいいくつかの点について整理しておきたいと思います。

第 1 に、公平な援助提供者が、政府、NATO、国連、不朽の自由作戦、さらに反政府武装勢力の安全保障政策から独立した活動を許されることは必要であると繰り返し訴えます。

第 2 に、すべての紛争当事者や援助団体に対して、機能している医療施設の中立性を保証するよう、ここに再度要請します。これは次の事を意味します。

- 医療施設の敷地内を武器持ち込み禁止とする
- 非武装の医療・人道施設、車両、敷地に対する武力行使を行わない
- MSF の施設内にいる患者に対して、逮捕や情報提供を求めたりしないと約束する

第 3 に、私たちは、公平性によって動かされる人道援助の「美德」と、反政府勢力対策作戦や国家建設の責務によって動かされる援助の「皮肉」という対比をしたいとは思っていません。ただ、MSF が援助を人道的な基準で評価しているという点を強調したいだけです。その基準とは、援助が他の目的ではなく、その国全体で最も援助を必要としている一般市民の極めて重要なニーズに見合っているかどうかという点です。

第 4 に、NATO の公式見解やその展開方法において、特定の主義に賛同して救援物資を配布する者と、公平な人道援助団体という、2 種類の援助団体を明確に区別することの重要性を強調しておきます。

最後に、米軍の統合出版物 3-57 の一節を読みます。これは「民軍作戦」を説明する項で、このように書いてあります。「友好的、中立的、または非友好的な作戦地域において、軍隊、政府、(民間 NGO)……そして一般市民との間の関係を構築し、維持し、影響を与え、活用する司令官の活動は、軍事作戦を円滑にすること、そして米国の目的を強固にし、これを実現するためのものである」

これまでにお話してきたことから、こうした記述によって私が何を憂慮しているかはお理解いただけることと思います。これは MSF 全体としても憂慮するものです。相互理解は私たちにとって重要です。MSF は「目的の一致」を信じていませんが、より最近になって広まっている「理解の一致」という発想の方が、「目的の一致」という発想よりも現実に近いのではないかと考えています。あらゆる紛争当事者との共通理解、というよりは相互理解によって、戦争による荒廃をくいとめるための公平な援助活動を可能とすること。それが MSF の求めているものです。ありがとうございました。